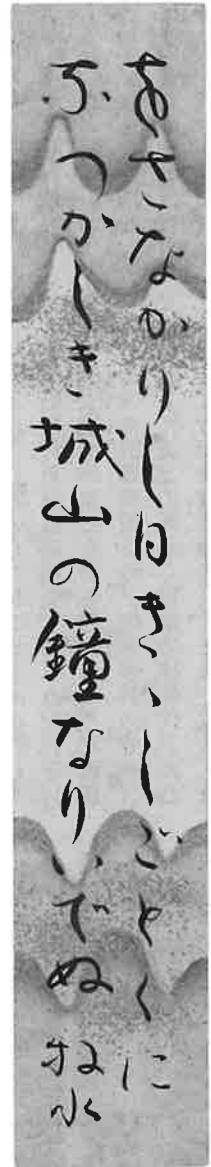


# 沼津市若山牧水記念館

第46号 2011.3.15

編集・発行 沼津市若山牧水会 TEL・FAX 055-962-0424  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



## をさなかりし日き、しごとくに なつかしき城山の鐘なりいでぬ 牧水

この短冊(本会所蔵)の面白いのは、一般の短冊とは反対に左側から歌が書かれていることで、その理由は不明だが、牧水の気紛れと考えてにやりと笑ったりするのである。

なつかしき城山の鐘なりいでぬをさなかりし日きしごとくに

城山の鐘が鳴り始めた。幼い頃に懐かしく聞いたあの鐘が疲れ果てた身を慰めるように今も鳴っている。時を戻すように・・・。

昭和二年の五月、牧水は『詩歌時代』発行と家の新築の際の借金返済のために、最後の揮毫旅行として朝鮮に渡ることにした。五月四日沼津駅発、大阪から広島を経て、十日に延岡着。十一日には大分、そして下関、北九州の社友を訪ね、十六日に朝鮮という旅であった。朝鮮旅行は釜山、光州、羅州、珍島と巡り、金剛山に登り、そのあたりから体調を崩し、七月十二日に下関に戻り、十七日に延岡の台雲寺に落ち着いた。台雲寺は母の異母弟に当たる長田観禪が住職であった寺で、そこから坪谷へ寄り、沼津へ帰ったのは三十一日の早朝であった。『創作』九月号の「創作社便」に

長い旅より帰つて来て今日で三十二日目、あやしき机に向つてをります。まことはチャブ台を布団の上に置きたるものです。覚悟してゐた以上の勞れが出て、帰つてからずつと寝込んでゐたといふわけです。

とある。

この「城山の歌」は、いつ作つたものか、朝鮮旅行の前か後かと考えると、やはり落ちて着いてほつとした台雲寺滞在時に作られたものと見るのが妥当だろう。「をさなかりし日」は牧水十二歳頃か。坪谷小学校を首席で卒業後、延岡の高等小学校に進むため、父の知人佐久間清久方に寄宿して佐久間夫妻から大変可愛がられたという。その後、延岡中学校の新設に当たりその一期生として入学。明治三十二年の春のことであった。以後同三十七年に早稲田大学へ進学するまで牧水は延岡で過ごすのだが、この延岡中学時代が歌人牧水の萌芽の時代で、新聞、雑誌類への投稿から、同人誌的な雑誌の発行など目覚ましい活動の記録が残されている。

延岡城は一六〇三年(慶長八年)に高橋元種(延岡藩主)が築いた城。この城跡に明治十一年に鐘樓を建立し、今山八幡宮から鐘を移した。以後、朝の六時から夕方五時まで毎日六回、鐘の音が鳴り響きつづけている。

なお、「城山の歌」の歌碑が昭和十年城山公園に建立され、毎年三月中旬に歌碑祭が行われている。(須永秀生)

# かたはらにおく幻の椅子一つ

——大西民子の歌と人生——

林田恒浩



大西民子（平成5年12月19日）（波濤短歌会提供）

私は、両親が北原白秋の「香蘭」「多磨」から出発をして、いわゆる親子歌人として木俣修の「形成」に入会したが、そこで幸いなことに当代きつての女流歌人と称えられた大西民子に、少年の頃から三十年の長きにわたって語り尽くせぬほどお世話になった者である。

民子が六十九歳で急逝したのは、平成六年の一月のことだったからもう既に十五年以上の歳月が経ってしまった。亡くなった後も大西短歌を愛する人は全国に実に多く、根強い人気を保っていることを実感している。

大正十三年の五月に盛岡市で生まれた民子は、奈良女子大学を卒業したのち教職につき、戦後まもなく大西博と結婚した。以降子供の死産、父母の逝去、夫との離婚、最愛の妹佐代子の心臓麻痺による四十歳での急逝、そして六十九歳

での自らの急逝まで、多くの人々によく知られている実人生での多くの不幸が民子の作品への共感を呼んでいるのか、私はその説にうなずきつつも決してそれだけの理由ではないと考えている一人である。

何故、大西短歌が多くの人の心を引きつけるのか、その理由というか「謎」のごときものを、聴衆の方々と一緒に考えてみたいと私は思ったのである。

長時間にわたって当日お話をした詳細に触れることは、紙幅との関わりもあり到底無理なので、民子の全作品数千首のなかから格別よく知られているものに絞り込んで次に紹介してみたいと思う。

かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待つ夜もなし今は 『まぼろしの椅子』

この第一歌集のというより、民子の全作品を代表する有名な一首である。家族の誰からも祝福されない、大西博との結婚であった。赤子を死産したあと、博は小説家として、民子は歌人としての願望をはたすべく手にとるよう

平成二十二年十月三日（日）、沼津牧水祭・短歌大会において「かたはらにおく幻の椅子一つ——大西民子の歌と人生——と題する講演と応募作品の講評をさせていただきました。多くの聴衆の方々及び関係者の方々に丁寧なるご配慮をいただいたことにまず心からの御礼を申し上げます。



『自解 100 歌選 大西民子集』  
(昭和 61 年 牧羊社刊)



『まぼろしの椅子』  
(昭和 31 年 新典書房刊)  
(さいたま文学館提供)

して盛岡から大宮へ移住したが、間もなく大西博の生活は荒び、挫折のはてに全く家へ帰って来なくなる。  
『自解一〇〇歌選 大西民子集』に、民子は次のように記している。

大の文学好きで、月給の大半を文学書の購入にあて、家計を顧みないような人であった。そんな彼が私は好きであったが、埼玉県に出て来てからは、教師時代には一滴も

たしなまなかつたのに、俄かに大酒のみになった。— 中略 — だんだん帰って来ない夜が多くなり、やがて全く帰らない人になってしまった。夫は小説を書き、私には歌を作って、机を並べて文学の道を行こう、という結婚のときの約束は反古になった。隣りの夫の椅子は、くる夜もくる夜も空席のままであった。

どうすることも出来ない絶望感と、人間として一人の女性としての悲しみにあふれた歌である。民子の葬儀の夜、大西博が来ていたと言っていた人がいたが、私は会うことがなく、博もその後まもなく亡くなってしまったと風の噂で聞かされている。

第一歌集『まぼろしの椅子』によつて民子は、当時擡頭して来た女流歌人の馬場あき子・山中智恵子・安永露子・三国玲子・富小路禎子らと共に歌壇の第一線に登場し、年ごとにその動向・作品は大きな注目をあびることとなるのである。

身を逼むる不文の掟思ふ夜もミモザがこぼす黄なる花びら 『不文の掟』

昭和二十八年の末頃から、いわゆる「前衛短歌運動」がおこり歌壇は激しく揺れ動くこととなるが、当時塚本邦雄・岡井隆・寺山修司などとの交流により民子の作品は少なからずその影



『不文の掟』 (昭和 35 年 四季書房刊)

響を受け、民子にはめずらしくこの歌集『不文の掟』には難解な歌が多く、よく知られたこの作品も上の句がとめてわかりにくい。

「つねに自由なように見えながら、その実は、過ぎ去った年月の影がただ一つだけの未来を人に規定してゆく」というジイドの言葉をこの集のあとがきに私は記したが、周囲の猛反対を押し切つて結婚し、失敗した私の未来は、こうした過去を背負つて歩くことになるだろう。そのせはめられた未来を、かりに「不文律」と考え、「不文の掟」と分けて言つて見たのである。

とジイドの言葉をも引用して民子は述べているが、「そのせはめられた未来」をイコール「不文の掟」と仮に設定し、そして

卓上に散る細かいミモザの花、人間の幸福もこの花のように毀れやすいのだ

とこの歌はいつているのである。

〔自解一〇〇歌選 大西民子集〕

なお、この歌集名は「ふぶんのおきて」と読むのが正解で、民子自身の口から直接聞かされているのでこれは間違いない。

たとえこの歌の意味が少々わからなくても、リズム感に富んで愛唱性のある美しい歌と言えよう。



『無数の耳』  
(昭和41年 短歌研究社刊)

てのひらをくぼめて待てば青空の見えぬ傷  
より花こぼれ来る  
『無数の耳』

「民子の作品がわかりにくい」と昔そう言った人がいて、それは『不文の掟』あたりの時代の作品を指しているのだろうと自分なりに納得して、あえてその時は反論はしなかったのだが、この歌のなかで眼目すべきは「青空の見えぬ傷より」であることは誰しもがわかる。

あくまでも平易な表現をもって、ある時は読者をドキリとさせる「凄み」をこの歌も感じさ

せるものがある。この一首について沢口芙美は、『大西民子の歌』の解説のなかで

大西の歌は、読み方によつては凄惨な内容になるものが、言葉使いのやさしさで、それを感じさせない。苦しみや悲しみに対し、自己主張し、抵抗するのではなく、受容する姿勢のためである。

と述べている。

また、馬場あき子は、大西について

幻想的な感覚がみえざるものの実在を感受させるに長けていた。

と述べ、この歌について

ただか幻想といった程度のもものと解してはならない

と述べている。

〔自解一〇〇歌選 大西民子集〕



沢口芙美『大西民子の歌』  
(平成3年 麗書館刊)



『雲の地図』  
(昭和50年 短歌新聞社刊)

朝明けて白布に顔をおほひやり今いつさい  
をわれは失ふ  
『雲の地図』

『雲の地図』は、ひっそりと肩を寄せ合つて暮らしていた最愛の妹佐代子を、ある夜突然心臓麻痺で失ってしまうという、まさに慟哭の歌集である。

十代の頃から民子の自宅へよく行くことがあったが、佐代子は少し身体は弱く見えなが眼のパッチリとした長身の美しい人で、愛犬のローリエと共によく相手をしてくれた思い出がある。享年四十歳。

ついさつきまで笑って話していた妹が、突然死んでしまうなどは、まだ夢のようであった。急性心不全、駆けつけてくれた医師は何本も注射をうち、人工呼吸を施してくれたが息を吹き返すことはなかった。

昭和四十七年六月四日の未明のことを、民子はこのように記している。

〔自解一〇〇歌選 大西民子集〕

妹佐代子についての作品をもう少しだけ付け加えておく。

してやらむこと何もなく名を呼びて水を替へたる花籠を置く  
『雲の地図』

まだ何か奇蹟を待ちてゐるわれにをりかさなりて用電は来る

眉墨を刷はきてやらむにせとものやうにつめたし死人の頬は

妹よ父よ母よとつぎつぎに蓋をして蠟の火を消しゆきぬ

われの死を見ずにすみたる妹とくり返し思ひなぐさまむとす

亡き人のシヨールをかけて街行くにかなしみはふと背にやはらかし

亡き人の使ひ残せる香水も飛びて小さき瓶すきとほる

ことされてわれにかかりし重みなどよみがへりつつ忌の夜をゐる  
『野分の章』

留守のまになりと来りて漕ぎゆけよ在りし日のままに揺り椅子を置く

亡き人の真珠の耳輪手にのせてかなしみはふとわれを清くす  
『風 水』

逝きしより八年を経ておもかげもいつしか写真の顔に定まる

階段あかりまで灯をともし待ちをればひとりぐらゐは戻りて来ずや  
『風の曼陀羅』

最愛の妹の佐代子を失った民子は、ここにしまき天涯孤独の身となつてしまつたのであるが、「ことされてわれにかかりし重みなどよみがへりつつ忌の夜をゐる」の作品をはじめとして、民子の心中を思うとつくづくと私は涙を禁じ得ない。



『野分の章』  
(昭和53年 牧羊社刊)

道のべの紫苑の花も過ぎむとしたれの決めたる高さに揃ふ  
『野分の章』

『野分の章』の、巻頭歌である。

人間を超える世界を虚心に見直したい思いにかられていたからであった。芭蕉の言う「造化にかへれ」に従つて、大自然の前に無心でありたいと願つたからであった。季節は秋、道ばたの紫苑の群れを仰ぐと、申

し合わせたように背丈をそろえて、二メートルほどの高さである。

と『自解一〇〇歌選 大西民子集』で民子は述べているが、この歌も下の句がまことにさりげないが何ともいえない迫力をもつて訴えてくるものがある。

沢口美美は、『大西民子の歌』で

前歌集『雲の地図』で妹の死に遭遇し、身も世もなく嘆き悲しみ、苦しんだ境地から、一步脱け出て、新たな認識の深さを示す歌である。つまり、「たれの決めたる高さに揃ふ」という表現には、この世の現象は人知を越えたものに動かされている、その法則をみつめ、そこに身をまかせよう、という苦しみを経た後の、この世の存在への謙虚なまなざしが感じられるからである。

とこの一首を解きあかしているが、まさしくもつて至言といふべきであろう。

一本の木となりてあれゆきぶりて過ぎにしものを風と呼ぶべく  
『風 水』

岩槻市にある菅野家(民子の旧姓)の菩提寺である「浄国寺」に、はじめて建立された歌碑に刻まれている歌である。七首ぐらいの歌のなかからなるべく歌碑にふさわしい無難なものと考へて採用されたと聞いているが、ゆつたり



『風水』(昭和61年 沖積舎刊)

としていてなかなか風格の感じられる作品である。上の句を民子自身と喩えるところとつとめてわかりやすい歌ではあるが、昭和六十三年五月に歌碑の除幕式が行なわれた日も民子は体調が優れず、その姿は痛々しいほどであった。正直、亡くなる五年ほど前からの民子もはや平常ではおられぬ体調であったのであるが、「形成」という結社内そして歌壇からの仕事の量は増えるばかりで、弱って行く自らの身体を宥めつつ民子にとつてどんなに辛い日々であったかを今にして私は思うのである。民子のこの第七歌集『風水』は、第十六回「逍空賞」の受賞歌集となっている。

そのままを告げよとならば声あげてきゆん  
と泣きたき思ひと言はむ 『印度の果実』

昭和五十八年四月四日、満開の桜が散りそめるなか、私たちの師である「形成」主宰の木俣修が七十六歳をもって逝去。信じられない思い

と、何もご恩返しが出来なかつた慙愧の思いが入りまじり、滂沱の涙にくれた日々が昨日のことのように思い出されるのだが、この一首はその師木俣修にささげた挽歌である。盛岡から大宮に来てから、民子の作歌上のみならず、人生の苦悩をつぶさに理解してくれていた父親のごとき存在でもあった。木俣修亡きあとこの「形成」を病身をもって民子は必死に支え守つてきたのであるが、それは師の恩に少しでも報いたという「忠誠」に近いものであつたことが、残されている民子の多くの手紙にはつぶさに記されている。他に、師木俣修に関わる作品には次のようなものがある。

声あげて泣きて醒めしがうつつにも夢にも  
おはす先生ならず 『印度の果実』  
み柩に黄菊白菊入れまつるこの世の顔を寄  
せあひにつつ  
みそなはずすべなきものを喪の花の蘭は白  
磁のさまにしづもる



木俣 修 (『木俣修全歌集』から)



『印度の果実』  
(昭和61年 短歌新聞社刊)



『風の曼陀羅』  
(平成3年 短歌研究社刊)

ねんごろの見舞ひなりしが去りぎはに人の  
いのちを測る目をせり 『風の曼陀羅』

平成三年十一月刊行の第九歌集『風の曼陀羅』は第七回の日本詩歌文学館賞を受賞し、翌年十一月には長年の業績に対して紫綬褒章がさづけられている。この歌は亡くなる二年前ほどの作品であるが、見舞いの言葉とその目の表わしている本音の相違を下の句で実によくとらえている。私の手元にある民子の手紙を改めて読

むと、この頃の民子の体調は最悪の状態であつて痛々しいばかりである。

この生前で最後の歌集になった。「風の曼陀羅」には、次のような秀歌も含まれている。

オルゴールを閉づれば戻るしじまありよは  
ひは既に乱を好まず 『風の曼陀羅』  
待ち針をさし替へをれば人の世のおほよそ  
はずでに身を過ぎてをり  
無数の手が今し動きて灯をともし制限なら  
め暮れて来にけり

とどこほる雲のごときは差し措きて力ある  
者走り続けよ 遺歌集『光たばねて』

平成五年五月、戦後有効の大結社であつた「形成」が解散を宣言した。木俣修逝去の後、ちょうど十年目のことであつた。

「散り散りになる会員がかわいそうだから」としか民子はいわなかつたが、新歌誌刊行への道を決然として選択した。この頃の民子の体調は最悪といつてもよい状況であつたことは既に述べた通りのだが、「よはひは既に乱を好まず」が正直な心境であつたとしたら無理を承知でそれなら何故民子はそのような状況であえて「乱」の渦中に自ら飛び込んだのだろうか。一言だけいえばそれは「死を覚悟した上で、文学者としての最後の矜持を示した」のであると私は信じている。そのような民子の思いが理解で

きたから、私は新歌誌刊行の先陣を切つて民子のために走りまわつたわけである。

「とどこほる雲」は民子自身のことであることはいふまでもない。

この一首は、「波濤」創刊号のなかの一首で、その創刊号を手にした一週間目に民子は大宮市堀の内の自宅で心筋梗塞のために急逝している。享年六十九歳。



『光たばねて』  
(平成10年 短歌新聞社刊)



『波濤』創刊号 (平成5年12月)

修と民子に師事して夢のような三十年であつた。修からは子供のように可愛がられ仲間までしてもらつた。民子からはその生命が尽きる日まで共に行動し、最後の最後まで民子から信頼してもらえた。いまだ至らぬ者なれど、歌人としてこれ以上私は望むところはない、本懐であるといつても過言ではない。

ここまで民子の歌を採り上げてきたが、薄幸の人生という事実にしつかりとした手法によって作品が成立していることがおわかりいただけたと思う。

\* \* \*

最後に、大西作品に触れた論考の一部を紹介してこの稿を締括りたい。

○ 篠 弘 「弧絶のユートピア」

その幻想的なイメージに見るべきものがあるが、けつして大西は、韜晦術に頼らなかつた。諧謔を弄する発想が、みずみずしい抒情を涸渇させることを知っていた。生きる苦澁を幻想的なイメージのなかに溶解させることによって、日常のなかから詩を見出しつづけてきたのである。その自己凝視の眼に遊びのなかつたことが、今日における大西の播るぎない評価となつていく。

日常における予知のできない不安定的なもの、得体の知れないものをさぐり、幻想的なイメー

# 牧水と山頭火

旅と酒の背景

渡邊 紘



種田山頭火 (防府日報 提供)

これら三句は旅の途中、山頭火が思わず口ずさんで旅日記に記した作である。もとより彼自身、会心作としてこれらを自選句集『草木塔』に載せているわけではない。

一読すれば誰しも句の背後に、牧水の名作

幾山河こえさりゆかば寂しさの  
はてなむ国ぞけふも旅ゆく  
の存在に気づくはずである。

それほどにこの「幾山河」は山頭火を魅了し、彼自身この歌を吟じつつ旅路を重ねていたのであつた。  
山頭火と昵懇であつた大山澄太にこんな一文がある。

(昭和十三年) 六月五日柳井に下車して伊保庄に造り酒屋村上盤太郎を訪ね二人で「幾山河」を心ゆくまで飲んでゐる。村上さんは可郷と号し若山牧水門下の歌人。柳井に出て藤田文友を訪ね、「幾山河」を携えて帰庵、樹明・敬坊と快飲してゐる。  
(春陽堂版『定本山頭火全集』第五巻・解説)

## 一 旅人ふたり

牧水に

ずんぶり濡れてけふも旅ゆく

(昭和一三三三二二)

幾山河あてなくあるいて藤の花ざかり

(昭和一四四二二八)

牧水の歌を誦して

秋ただにふかうなるけふも旅ゆく

(昭和一四二〇二〇)

山頭火の句友に和田秋兔死(光利)がいる。

山頭火と同様、荻原井泉水主幸の『層雲』の同人で山形は鶴岡の俳人だが、昭和十一年四月、

山頭火は伊豆の周遊の旅路から東京での『層雲』中央大会に参列の後、五月甲州路、六月新

潟の良寛遺跡をまわり、一三日には和田居に草鞋にあらず地下足袋を脱いでいる。二人は夜の

更けるのも忘れて飲み語り詠った。秋兔死は詩歌の朗詠が巧みだったから、そこでも山頭火は

秋兔死に「幾山河」の朗詠をせがんでいる。

山頭火の『其中日記』に当たってみると、

六月五日 晴。朝から酒、それもよろしい

(Mさんのところは造り酒屋で、Mさんはその主人で、しかもさうたうの左党だ)、

お土産として生一本を頂戴する、酒銘として幾山河は好いでないこともないが、牧水の

門人としてのMさんの心意気が見えてうれしい、殊に傍書の「白玉の」の歌はうれ

しい。(中略) 更けて戻つて、そのまゝ寝た。



# 牧水と山頭火

旅と酒の背景

渡邊 紘



種田山頭火 (防府日報 提供)

これら三句は旅の途中、山頭火が思わず口ずさんで旅日記に記した作である。もとより彼自身、会心作としてこれらを自選句集『草木塔』に載せているわけではない。

一読すれば誰しも句の背後に、牧水の名作

幾山河こえさりゆかば寂しさの  
はてなむ国ぞけふも旅ゆく  
の存在に気づくはずである。

それほどにこの「幾山河」は山頭火を魅了し、彼自身この歌を吟じつつ旅路を重ねていたのであつた。

山頭火と昵懇であつた大山澄太にこんな一文がある。

(昭和十三年) 六月五日柳井に下車して伊保庄に造り酒屋村上盤太郎を訪ね二人で「幾山河」を心ゆくまで飲んでゐる。村上さんは可郷と号し若山牧水門下の歌人。柳井に出て藤田文友を訪ね、「幾山河」を携えて帰庵、樹明・敬坊と快飲してゐる。

(春陽堂版『定本山頭火全集』第五卷・解説)

## 一 旅人ふたり

牧水に

ずんぶり濡れてけふも旅ゆく

(昭和一三三三二二)

幾山河あてなくあるいて藤の花ざかり

(昭和一四四二二八)

牧水の歌を誦して

秋ただにふかうなるけふも旅ゆく

(昭和一四二〇二〇)

山頭火の句友に和田秋兔死(光利)がいる。

山頭火と同様、萩原井泉水主宰の『層雲』の同人で山形は鶴岡の俳人だが、昭和十一年四月、

山頭火は伊豆の周遊の旅路から東京での『層雲』中央大会に参列の後、五月甲州路、六月新

潟の良寛遺跡をまわり、一三日には和田居に草鞋にあらず地下足袋を脱いでいる。二人は夜の

更けるのも忘れて飲み語り詠った。秋兔死は詩歌の朗詠が巧みだったから、そこでも山頭火は

秋兔死に「幾山河」の朗詠をせがんでいる。

山頭火の『其中日記』に当たってみると、

六月五日 晴。朝から酒、それもよろしい

(Mさんのところは造り酒屋で、Mさんはその主人で、しかもさうたうの左党だ)、

お土産として生一本を頂戴する、酒銘として幾山河は好いでないこともないが、牧水の

門人としてのMさんの心意が見えてうれしい、殊に傍書の「白玉」の歌はうれ

しい。(中略) 更けて戻つて、そのまゝ寝た。

何といふ寂しさだらう。どこにゐても落ち  
つけない私ではある。……

牧水逝去は昭和三年九月だが、十年後のこの  
時分、酒仙のイメージのあった牧水の名歌「幾  
山河」はすでに酒銘にまでなっている。傍書の  
「白玉の」は、牧水の酒歌を代表する、

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづか  
に飲むべかりけれ

である。

山頭火の方も没後、種田酒造の後を継いだ大  
林酒造(現在は金光酒造)が銘酒「山頭火」を世  
に出して愛飲され、傍書の句は、次のとおりだ。

分け入つても分け入つても青い山

月が酒がからだいつばいのよろこび

さて、再び山頭火を魅了して止まなかつた牧  
水歌である。

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国  
ぞけふも旅ゆく

この歌は明治四〇年(一九〇七) 牧水二二歳  
(満年齢)、早稲田の学生で夏休みのために帰郷  
の旅路でのことだ。六月二二日、二人の友人と  
共に東京を出て、京都では名所旧跡を訪ね、友  
人と別れた二七日から牧水は神戸からの船旅を  
捨てて、陸路、中国路を歩いて九州に渡る旅路

を選んだのは、姫路出身の詩友が海と山との景  
観を称揚していたからだ。神戸を汽車で立って  
岡山駅に着いた二九日の夜、駅前の旅館に泊  
まって三〇日の朝から脚絆に草鞋を履くと高梁  
川を廻り岡山県から広島県への国境を越えるの  
だ。三〇日は高梁町、七月に入って新見町に泊  
まった。牧水は歩きに歩きつづけた。翌日の二  
日、国境の二本松峠に立つと海拔四百十三米の  
峠にはその名のとおり二本の老松が備中、備後  
のたたなづく山々と平原を見渡していた。その



「幾山河」を詠んだ頃の若山牧水

夕べ牧水は傍らの茶屋「熊谷屋」に草鞋を脱い  
でいる。ここから牧水は山陽道の美しさを語つ  
た友、有本芳水に葉書をしたためた。

貴兄のご推奨の景観、余すところなく満喫  
して国境の峠に立った。その愉快、言うべ  
き言葉なし

その末尾には二首の歌があった。この「幾山  
河」に並んでもう一首が……。

けふもまたこころの鉦をうち鳴しうち鳴し  
つつあくがれて行く

実はこの春ころから牧水は、美しい人妻で  
あった園田小枝子との恋の甘美と懊惱が始まっ  
ていた時分である。この歌には手が届きそうで  
手にすることのできない現実とあきらめようも  
ない傷心が隠されているのかもしれない。され  
ど「幾山河」はこうした諸事情から屹立して、  
人生を語っている、と私は思う。名歌中の名歌  
に相違ない。そして、この名歌に相当すること  
き句が種田山頭火によって生み出されている。



「幾山河」の半切  
(高橋希人氏寄贈)

大正十五年四月、解くすべもない惑ひを背負うて、行乞流転の旅に出た。

分け入つても分け入つても青い山

この一句は新生、山頭火のまさに門出を象徴するかのような名作である。大正一五年(一九二六)は昭和改元となった年でもあるが、山頭火はすでに四四歳になっていた。泥酔のあげく熊本市公会堂前を進行中の電車に立ちはだかつて急停車させ、市内報恩寺に連行されて出家得度、耕畝と改名した。座禅修行を経て前年の三月五日には、熊本県鹿本郡植木町味取観音堂(曹洞宗瑞泉寺)の堂守になっていた。それが、一年一ヶ月後のこの四月、山林独住に倦みつかれて観音堂を去り、一笠一鉢、墨染めの法衣をまとい行乞放浪の旅に出たのだった。「層雲」十一月号には「分け入つても」ほか七句が掲載された。山頭火は再び注目をあびて俳壇に復帰したのだ。後年、自選の一代句集『草木塔』には、

このうち四句が採られている。

分け入つても分け入つても青い山

(大正一五年作)

しとどに濡れてこれは道しるべの石

(大正一五年作)

炎天をいただいて乞ひ歩く

(大正一五年作)

放哉居士の作に和して

鴉啼いてわたしも一人

(大正一五年作)

山頭火と並ぶ荻原井泉水門下の尾崎放哉は同年、四月七日、小豆島で没していた。「層雲」異能の俳人尾崎放哉墓参の念にかられた山頭火だったが、六月一七日、暫く滞在していた熊本市内の報恩寺を後にすると日向路に向かつて、行脚は御船川を遡り馬見原へ、そこから宮崎への県境を越えて高千穂に分け入つて、二二日には五ヶ瀬川沿いに下つて東臼杵郡北方町滝下に着いている。この間に生まれた一句が「分け入



「分け入つても分け入つても青い山」の半切

(松山市立子規記念博物館蔵)



『草木塔』(山口市小郡文化資料館蔵)

つても」で、これまた人生の深淵を語っている。「幾山河」と「分け入つても」、創作に一八年の隔たりはあるが、一方は溪谷を遊行して岡山(備中)から広島(備後)へ、一方は溪流沿いに熊本(肥後)から宮崎(日向)への国越えて季節は共に緑色濃く、緑陰の慕わしい時期を迎えていた。そして牧水、山頭火、ふたり共に解くすべもない惑ひを抱えての旅路であった。

改めて私はこの短歌と自由律俳句に、「人生を語る」相似通うものを見出している。

月日は百代の过客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらへて老をむかふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

世に知られる芭蕉の「おくのほそ道」はここに始まる。舟子であれ馬子であれ、私たちの人生は限られた時間の習俗の住人であつて、一過性の旅人である。老いは誰しも免れることなくやがては終局を迎える。

牧水の眼前には雲烟渺茫たる山脈がつづいていた。近くには緑の山々が次第に碧色から薄い

青色を帯びてやがては蒼穹に消えてゆく。人は誰しもあの山々と渓谷の河を越えて歩まねばならない。牧水はそうしたたどり行く人生のさびしさを予感し、あろうはずもない「寂しさのほてなむ国」であつても、そこにあくがれてゆかないことを宿命づけられた、生きとし生けるものへの愛しさと悲しさを思つたことだろう。

山頭火もまた山岳重畳、分け入つても分け入つてもつづく全山萌え出るような緑の中を歩き、溪流に水を汲んだ。行けども行けども奥深く到着できない、この徒歩禅はいつたどこまでつづくのだろう。禅に帰依した煩惱のわが身に涅槃（究極の安らぎ）は姿を見せてくれるのだろうか。所詮、徒勞に終わろうとも行くしかないのだから。

水は流れる、雲は動いて止まない、風が吹けば木の葉が散る、魚ゆいて魚の如く、鳥とんで鳥に似たり、それでは、二本の足よ、歩けるだけ歩け、行けるところまで行け。

『行乞記』(昭和五九二四)

だが、私は牧水の歌境、山頭火の句境は、背負うた人生の重荷にけつしてうちひしがれてはいない、と思う。ジャンルは異なるが二つの作品には、なにかを求める確かな足取りや前途に向かう意志といつてもよい、青い山脈をゆく彼等にほのかな明るさや望みごときものが秘められていて予感するからだ。



若山喜志子 (昭和3年2月1日)



『筑摩野』(昭和5年刊)

やみがたき君がいのちの飢かつゑ飽き足らふまでいませ旅路に  
 汝が夫は家にはおこな旅にあらば命光ると  
 ひとの言へども  
 おもひ立てばげに足もとの鳥よりもあわた  
 だしきぞ君が旅立ち  
 『筑摩野』  
 『筑摩野』

牧水の妻、喜志子はかく詠つたが、牧水にとつて旅は汲めどもつきない新たな生命をよびさます再生の源泉であつたのだ。

## 二 ふたりの母

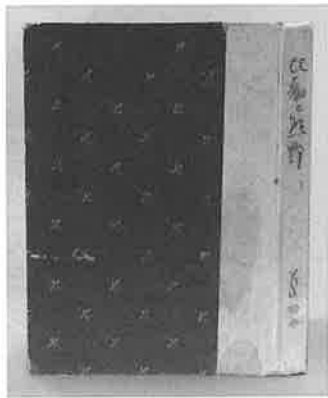
世上、知られるように若山牧水は旅に明け暮れた歌人であり、山頭火もまた漂泊流転の俳人である。そして二人ともにその生涯はまったく非凡なる酒飲みで、かつ酒によって生命を縮めてしまった。

共通項はまだある。山頭火が明治一五年二月生まれ、山口中学校から明治三四年、東京専門学校高等予科を経て早稲田大学文学部文学科の一期生なら、牧水は明治一八年八月生まれ、延岡中学校を経て明治三七年、早稲田大学文学科高等予科に進んでいる。もつとも山頭火の方は明治三七年の二月には神経衰弱で退学しているから、二人が共に都の西北、早稲田の杜に在つたことはなかつた。

そして、二人が共に母に因む雅号を持つた、あるいは山頭火の場合はそれらしい説のあることにもふれてみたい。

牧水の本名は繁である。その繁が牧水を称するようになったのは、明治三六年、十八歳の頃。牧水の両親は若山立蔵・マキである。もちろん牧水の「牧」は母のマキからで、「水」は尾鈴の山懐を流れる溪流からであろう。牧水は古里の「水」を好んでいた。

牧水三四歳の折の作である、「おもひでの記」(『比叡と熊野』所収)に「母の事」と題する次の一節がある。



『比叡と熊野』 (大正8年刊)

三つ子の魂という言葉があるが、ましてや五歳の童子である。長じてもお忘れ得ぬ思い出であつたらう。

或時はまた声も枯れ果て、たゞしくくと頬を抑へて泣いてゐると、母は為かけた仕事を捨て、おいて私を背に負ひながら釣竿を提げて溪へ降りて行つた。さうして何か彼か断えず私に話しかけながら岩から岩を伝つて小さな魚を釣つて呉れた。

私は五歳位から歯を病んだ。右も左も虫歯だらけで、痛み始めると果してどの歯が痛むのだから解らなくなり、まるで顔から頭全体が痛むかの様に痛んで来た。そんな場合、おい／＼泣きわめいてゐる私を抱いて一緒に涙を流してゐるのは必ず母であつた。私は母の涙を見ると一層に悲しくなり、尚更らに泣き上げたが、いつ知らずそれで痛みを忘れて、泣き疲れながら眠ることが多かつた。(中略)

歯を痛み泣けば背負ひてわが母は峽の小川に魚を釣りにき

『路上』

母マキはものの理を説くでもない、ただただわが子の痛みに寄り添い、自らの痛みとして共に涙する情の母である。それは遠藤周作の小説に登場するマリア像のようだ。母親とはかくあるべきもので、何を語らずとも母の愛に包まれた子というものは自分で理非曲直を身に備えてゆく。だから牧水は家郷を捨て親の期待に反しようとも、終世、母を思い母と結ばれていた。

あは雪を手にもてるごときあやふさを老いませば君につねに覚ゆる

『砂丘』

咒ふべきそむきがちな子のごころ老いたる親のその錆心

『砂丘』

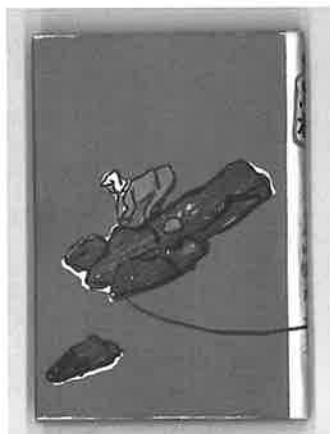
故郷に墓をまもりて出でてこぬ母をしぞおもふ夢みての後に

『黒松』

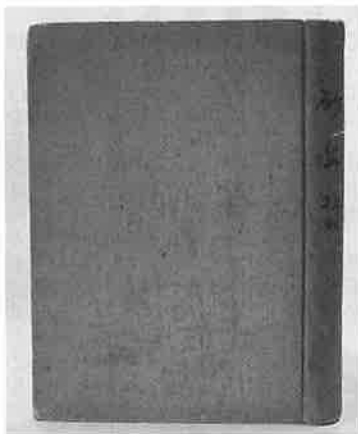
白き髪ちひさき御顔ゆめのなかの母はうつつに見えたまふかも

『黒松』

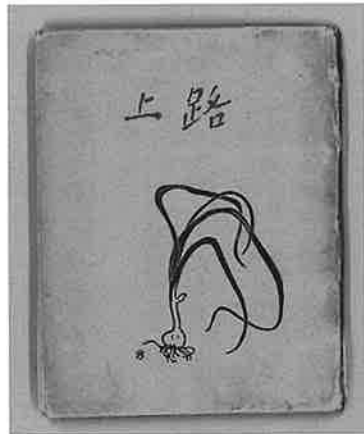
ところが、山頭火の原体験はあまりに悲惨であつた。まだ松崎尋常小学校四年生、十歳の折のことだ。八五〇坪余もあつた広い自宅の井戸に母フサは身を投げてしまったのだ。少年、正一(山頭火の本名)は井戸から引き上げられた母の死体をしっかりと眼に刻んでいる。濡れそぼつ母の黒髪は白い顔にまわりついていた。そ



『黒松』 (昭和13年刊)



『砂丘』 (大正4年刊)



『路上』 (明治44年刊)

の時、父竹治郎は妾の一人と物見遊山の最中であったという。半生を顧みて山頭火は記す。

彼の過去帳を繰りひろげて見る。――

最初の不幸は母の自殺。

第二の不幸は酒癖。

第四の不幸は結婚、そして父となつた事。

第五の不幸……

【其中日記】(昭和八二二八)

母はけつして成仏していない。山頭火の母への哀憐と父への嫌悪は消えることはない。

種田正一の当初の俳号は田螺公でんらこうであった。明治四四年、二九歳のころから弥生吟社(後に椋鳥句会と改称)の句会に出席、定型俳句を作り、酒や女に耽溺してまた種田酒造の経営に悩んでいた。その田螺公が萩原井泉水に師事して『層雲』同人になつたのは、大正二年、三一歳からである。この年三月から山頭火を称する。

この言い得て妙なる山頭火とはいかなる意味合いだろう。

納音なつおん説なるものがある。それは六十とおりの

干支に五行(木・火・土・金・水)組み合わせ、これを人の生年に当てて運命を判断することのようだ。明治一七年生まれは「井泉水せいせんずい」で山頭火の師は該当するが、山頭火の生年、明治一五年生まれは「楊柳木ようりゅうぼく」で該当せず昭和九年と一〇年生まれが「山頭火」になるのだとぞうだ。

(高島易断編集の年齢早見表)



『層雲』  
(山口市小郡文化資料館蔵)

となると、納音は当たらない。山頭火自身は

雅号の由来といふほどのものはありません。たま〜見出したその文字の音と義とが気に入つたので、いつとなく用ひるやうになりました。

【層雲】同人名簿(金蘭録(大正六年)

と書いているようだが、それを承知で山頭火と交遊のあつた和田健氏は言う。

山頭は山の頂の意味のほか、死体を焼く所、すなわち焼き場。多く山上にあつたからという。  
(大漢和辞典 巻四)

以下は氏の推論であるが、

十歳の時、井戸に投身自殺をした母フサの死体は、おそらく変死扱いにされ、野焼きにされたであろう。どこの山か定かでないが、野辺の送りについて行った少年正一の目に、燃える母の姿が焼き付いたに違

ない。無意識にしる意識的にしろ、山頭火の号を選ばした潜在意識の中に、私は母の死霊が忍び込んだのではと思うのである。そこに後年の放浪行脚の原郷があると言つてもよい。つまり「山頭火」の文字の中には、母と同行二人の幻影がひそんでいるのである。  
(「山頭火よもやま話」二〇)

そういえばこんな一句もあつた。

草しげるそこは死人を焼くところ  
(昭和八年作)

その他二説が紹介されるが、和田説が妙に説得力も持つているように見えるのは、たしかに生涯通して山頭火の俳句、日記等、母を追慕し、追善供養の情念が貫流しているからであろう。山頭火は好んで寺社を巡り、四国札所を二度も訪ね歩いて、旅中、笈の底には母の位牌が包まれていたし、其中庵、風来居、一草庵といずれに庵住しても香華を手向ける山頭火だった。

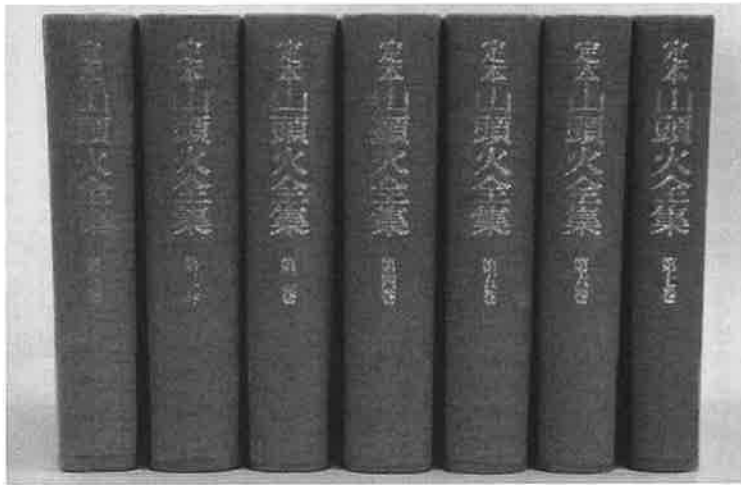
風の中声はりあげて南無観世音菩薩  
(昭和五年作)

山へ空へ摩訶般若波羅密多心經

みほとけのかけわたしのかけの夜をまもる  
(昭和七年作)

ひさびさ袈裟かけて母の子として

おもひでは菜の花のなつかしさ供へる  
(昭和八年作)



『定本 山頭火全集』 (昭和47年～昭和48年 春陽堂書店刊)

母の四十七回忌

うどん供へて、母よ、わたくしもいただき  
まする (昭和一三年作)

母の第四十九回忌

たんぼぼちるやしきりにおもふ母の死のこ  
と (昭和一五年作)

### 三 酒仙と酒徒

若山牧水と種田山頭火、この二人の酒と文芸との関わりはどのようなにたとえたらよいのだろう。

牧水の傍らにあった大悟法利雄氏の『歌人牧水』によれば、三十代の後半といえは牧水の晩年になるが、毎日三時頃には起き出して、一仕事、その後は朝飯になるのを待ってチビリチビリの朝酒、朝食後には一寝入りして、目覚めると千本松原を散歩して、仕事にとりかかる。昼になればまた一杯やって昼寝する。そして、仕事、夕方は早めに切り上げて、長い時間をかけての晩酌を楽しみ、その後は軽い夕食をすませると寝室に入る。こんな日常だったようだ。酒量は大体朝二合、昼二合、夜六合で、締めて一日で一升瓶が空となる。

ところが先年、読んだ本では、牧水の全盛期は一日二升五合、それが連日だったというから、開いた口がふさがらない。朝起きて四合、昼に五合、夜は一升以上(嵐山光三郎『人妻魂』マガジンハウス)というのまであった。

そんな酒好きがいるだろうか、と思うが、いたのである。種田山頭火だ。いったいどうなっているのだろうか。

「山頭火の酒の飲みっぷりは実にうまさうで、彼の顔が酒という字に見えました」とは、山頭火の其中庵に近くに住んでいた河内山光雄氏

(防府市在住・俳人)の述懐である。

(定本『山頭火全集』資料と研究 第五号)

もつとも山頭火の場合は行乞していたたお布施からだったり、其中庵、風来居、一草庵と庵住しても極貧生活だったから露命をつなぎながらのことである。

酒が好きのために仏門に入るやうになり、貧乏になったために酒毒から免かれてゐる、世の中の事は変なものであるわい(酒のため自己共に苦しみ悩んだ事はいふまでもないが)。

『行乞記』(昭和七・七・一八)

と、牧水のように思うがまさに酒杯に手を伸ばせる経済力がない。だから安い焼酎を啣(くは)めること度々だ。

気が滅入つてしまうので、ぐんぐん飲んだ、酔っぱらつて前後不覚、カルモチンよりアルコール、天国よりも地獄の方が気楽だ!

『行乞記』(昭和七・二・一五)

ほろほろ酔うて木の葉ふる

(昭和一三年作)

酔うてこほろぎと寝てゐたよ

(昭和五年作)

よい宿でどちらも山で前は酒屋で

(昭和九年作)

だが、これらの句のような微笑ましい酒飲み

山頭火は、それほど多くはない。

「酔うてこぼろぎ」の一句は山頭火四八歳の秋、宮崎の高鍋町を離れた山村でのこと、茅葺きの農家の戸口で心経を唱えていた。すると白髪の老婆が重い瓶を抱えて出てきた。「あんたこれが好きかね」と聞くので、素直に頷くと、こぼんこぼんといひ音がして薫りたかい焼酎を鉄鉢になみなみついでくれた。山頭火は立つたままふた息で飲み干して、あとは覚えがない。気がついてみたら、刈田の中で寝入つたらしい。耳もとでこおろぎがしきりに鳴っていた。そんな折にひらめいた一句で、因みにあの鉄鉢には七合半ほど入るとか。

こんなほろ酔い加減がいつもならいいのだが、山頭火の表現では酒の初めは「ほろく」「とろく」でも、やがて「どろく」「ぼろく」となればもういけない。あげくに「ごろく」となれば「ヤワー」「方言」となつてメチャにクチャだ。気がつけば路上にぶつ倒れていたり、時には留置場で朝を迎えたりだ。どうして、こんなになつてしまうのか。その後は身を切られる程に悶え苦しむ、反省してもまたまたの繰り返しだ。ある友は「よくあきませんねえ、おんなじことばかりやっていて」と言われたと、当の本人が日記に書いているから笑つていいのか、同情したらよいか。

山頭火に酒の秀句が少ないのも、こうした彼の飲酒癖に原因する。飲めば泥酔、どこまでも

下降する、自虐的になつてしまふのだが、不思議と句友、酒友が離れず付き合いつづけているのも、山頭火の酒徳、人徳というものか。『層雲』の両雄、尾崎放哉も相当の酒飲みだったが、放哉は周囲の肺腑を衝くような他虐性があったらしい。けれども山頭火にはそうしたところはなかった。

酒と句、この二つは私を今日まで生かしてくれたものである、若し酒がなかつたならば私はすでに自殺してしまつたであらう、そして若し句がなかつたならば、たとへ自殺しなかつても、私は痴呆となつてあつたであらう、まことに、まことに、南無酒菩薩であり、南無句如来である。

『其中日記』(昭和八・七・二六)



鉄 鉢 (松山市立子規記念博物館蔵)



其 中 庵 (山口市小郡文化資料館提供)

山頭火の日記は酒飲みの日記であるから、酒についての迷言は枚挙すれば尽きるところはない。また、酔後の自省句もまた数多である。

自 責

酔ぎめの風のかなしく吹きぬける

(昭和二年作)

百舌鳥するどく酔ひぎめの身ぬちをつらぬ

(昭和二年作)

酔うて闇夜の糞踏むまいぞ

(昭和十五年作)

泥酔は自己を忘れさせてはくれるが、自己を超越させてはくれない。

『其中日記』(昭和一一・五・二三)



とは山頭火、なるほど、自分では案外、わかっ  
ていたらしい。逝去の一ヶ月前にはこんな句を  
詠んでいた。

濁れる水の流れつつ澄む (昭和二五・九・八)

ほんとうに山頭火はこのとおりの生涯だった  
が、牧水は単なる酒徒ではない。

無論口であちはふうまさもあるにはあるが、  
酒は更らに心で嗜<sup>か</sup>みしめる味<sup>あじ</sup>を持つて居  
る。あの「酔ふ」といふのは心が次第に酒  
の味をあぢはつてゆく状態をいふのだと私  
はおもふ。斯<sup>こ</sup>の酒のうまみは単に心に味覚  
を与へるだけでなく、直ちに心の營養とな  
つてゆく。乾いてゐた心はうるほひ、弱つ  
てゐた心は蘇<sup>よ</sup>り、散らばつてゐた心は次第  
に一つに纏<sup>まと</sup>つて来る。

『樹木とその葉』所収「酒の讀と苦笑」

飲みたくて飲む時、これは前にも云つたが  
私は殆ど悉く心の、魂の要求から飲んだ場  
合が多かつた。咽喉が渴いたからと云つて  
呻りつけるのは極く稀に麦酒位のもので  
あつた。心が渴く、魂が孤独を叫ぶ、かう  
した場合が後來私になくなるとすれば或は  
私は酒をよすかも知れぬ。

『海より山より』所収「私と酒」

と記していることからしても、牧水は盛唐の李

白のように酔うほどに豊かに詩心、充足横溢し  
てくるのだから、彼もまた「詩仙」と称しても  
よいだろう。

たとえば牧水の酒は、深山の静謐な泉に投げ  
た小石がさざ波となつて拡がってゆくように次  
第に創造力を刺激され、詩心は高揚してゆくの  
だろう。牧水は独り酒を好んだそうだが、長女  
みさきは、『父・若山牧水』で

父の酒は綺麗であり、父の一座する酒の席  
は美しく、私たちは家庭の中で悪口や愚痴  
や卑猥な言葉を一度も聞くことなく育つた。

と書いている。むべなるかなと思う。

山頭火が一草庵日記にしたためた「白玉は」は  
もちろんのこと、社団法人沼津牧水会刊の『牧  
水酒のうた』には、九千余首の牧水短歌から  
三六七首の「酒の歌」が収録されている。よく  
ぞこれほどの酒歌を詠んだものである。

酒飲めばこころ和みてなみだのみかなしく  
頬をながるは何ぞ

それほどにうまさかと人のとひたらばなん  
と答へむこの酒の味

かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒  
の夏のゆふぐれ

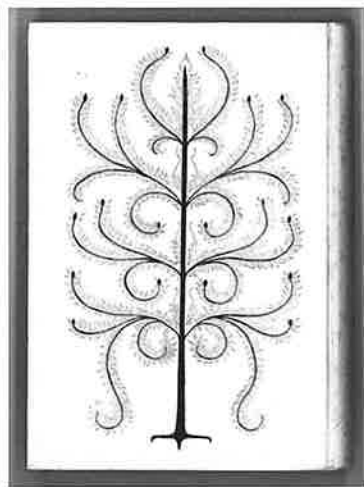
われとわが悩める魂<sup>たま</sup>の黒髪を撫づること  
く酒は飲むなり



『牧水 酒のうた』 (平成 19 年刊)



『海より山より』 (大正 7 年刊)



『樹木とその葉』 (大正 14 年刊)

終わりに、牧水の「酒仙」と山頭火の「酒徒」たる飲酒の向き、すなわち安定したる高揚と不安定な下降はいかなる原郷があつたのか、推量してみたい。

凡そ酒の飲み方とか酒癖には、案外、親から受け継がれたものと当人の成育環境など入り交じって形成されるのではないか、と思うことがある。

牧水の家系は祖父の健海は下戸だつたらしいが、祖母、父母、それから叔父や従兄弟たちも大酒飲みだつた。母のマキはかつては「坪谷の五升樽」と言われたものだ。しかし、みなみな鬱屈したところがなく、楽しみ明朗に飲んでいく。酒に酔つた牧水はサビのある抑揚に富んだ美声で朗詠したり、酔うほどにいよいよ人間の魅力や温かさが横溢して、誰しも魅了されたらしい。

だが、山頭火は違つた。酔うほどに不安定になつてゆくのは根源的な不安を刺激されるからだろう。飲んで飲んで自分を忘れたいからだ。その所以は母の自殺、次弟の縊死、三弟の夭折等々の近親の死があり、父のとどめない淫奔で

ある。そうした血脈への種田の「業」や大種田といわれた家の没落はもちろん影響したことだろう。

もしも、という仮定は詮ないことであるが、母フサが長命して慈しんでいたなら、あれほど泥酔して自己喪失を繰り返すこともなかつたろう。まさに彼の一句

どうしようもないわたしが歩いてゐる

(昭和四年作)

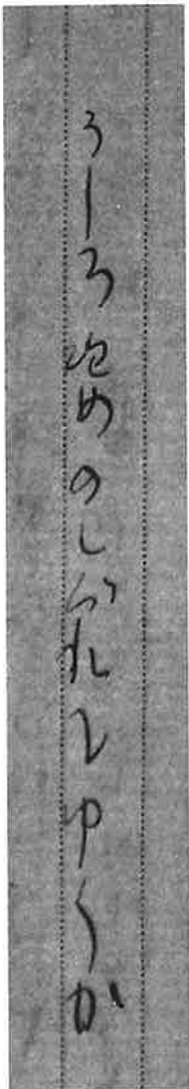
ような生涯もなかつた。まことに母の存在は偉大である。

かくて山頭火は酒仙になりえず酒徒で終わつた。人間だれしもまつとうに生きたいと願いつつも、一方「どうしようもない」自分が別のところにあつたりする。そうした人間存在にとつて、

自嘲

うしろすがたのしぐれてゆくか

やはり山頭火はうしろすがたの似合う酒飲みなのだ。



「うしろ姿のしぐれてゆくか」(山頭火「行乞記」から) (松山市立子規記念博物館蔵)

「プロフィール」わたなべ ひろし

昭和一六年下田市生れ。高校教諭を経て県立下田北高校長。平成一四年三島高校長。平成二一年同校退職。昭和五六年、五七年、六〇年、六二年に静岡県芸術祭賞、昭和五八年、五九年に同奨励賞、全国海外教育事情研究会懸賞論文受賞。著書に「峠——伊豆の文学」(昭和六三年静岡県出版文化会刊)、「山頭火の白い道——うしろすがたのしぐれてゆくか」(平成二二年角川学芸出版刊)。平成二二年九月に開催した文化講座で「山頭火の白い道」を講演。



「文化講座」で講演中の筆者



『山頭火の白い道』

## 第二十一回中学生短歌コンクール 口語体が持つ力

市内十六校から一八八九首の応募があった。

中学生時代の感動の焦点と言えば、部活動、修学旅行などである。更に淡い恋心の表白もあろうか。歌材はそこに集まり易い。それだけに個性の際立つ作品を得ることはむずかしい。少し視野を拡げて、日常の家族との触れあい、かすかなものへの心寄せなども欲しいと常々思つて来たが、今回はそれがかなり実現されたように思う。特選十首を掲げて寸評を付してみよう。

むし暑くせみの鳴き声うるさいと宿題しながら僕がいいわけ 矢野達也(今沢中)

暑さやせみのやかましさを、言いわけにして  
いる自分をちゃんと承知しているのがいい。言  
外に内省が込められている。

晴れた日に干した私のしきぶとん夜になつてもお日様の匂い 近藤晴子(第四中)  
主観は省いている。陽の匂いにはんわかとしたしあわせを思う作者。余情がある。

朝の駅人わらわらと降りてきてまたわらわらと吸い込まれゆく 大嶽 翼(片浜中)  
朝の雑踏が目に見えるようである。わらわらのリフレインが人の生業の哀感を呼ぶ。

地の底に閉じこめられて助け待つみな無事でいて祈りよ届け 三留光正(市立中等部)

千りの炭鉱事故の救出作業。地下七百米に救出を待つ人々への祈り。社会へ視線を向け、それを自分にとり込むことの大切さを思わせる。全員無事救出が叶った。熱い心の持主だ。

年賀状出した数より多く来たまた書くのかと顔がほころぶ 伊藤拓真(第三中)  
思いがけない友からの年賀状に返事を書く、やや面倒な気もしながらやはりうれしいのだ。その心うごきが素直に表出された。

テスト返しわくわくしていたはずなのにあまりににくい目の前の紙 若月響(第四中)  
期待はずれの点数に愕然とする。まじまじと見つめるテスト用紙である。目の前の紙とは実に具体的でその重さが思われる。

桜咲く明日は兄の旅立つ日さみしいけれど応援してる 筒井真子(戸田中)  
仲良しの兄の旅立ちの日が明日である。初めての別れか。兄妹愛がにじむ作品である。桜咲くは希みが自からかけられて出立にふさわしい。

人ごみにはほえむ君の顔見つけふる手にひびくまつりのはやし 北川雄祐(第一中)  
祭りのにぎやかさと、探し得た君の笑顔が融合して喜びが倍增する。下旬の感覚的表現巧み。

セミの声聞こえる間は夏だよとスイカ食べ食べばあちゃん話す 渡邊裕也(片浜中)  
人の話をよく聞く作者。おばあちゃんと孫の夏の昼のひとつときの光景が活写されて、何ともほほえましい。おそらく成人したのちも思い出

されるひとこまとなる。

太陽が仁王立ちする炎天下サーブとともに飛んでいく汗 植松勇斗(大岡中)  
部活動の作品が多くあったけれど、殊にこの作品の臨場感が高く評価された。今年の猛暑をとても適わない喩として、太陽が仁王立ちすると表現し得たことは手柄であった。

文語表現で千三百年の伝統を持つ詩型が、口語で詠まれるとき、より力を発揮できるという現在のありようが不思議に思われる。時代のニーズと言うべきか。話しことばで詠めるのだから若い人にとって好機である。どうか三年間を足がかりに詠みつけて欲しいと思う。選に当たったのは、須永秀生、曾根耕一、杉山芳春、星谷亜紀、青木朝子の五名であった。(青木朝子)



第 57 回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式  
平成 22 年 10 月 17 日 (日)

## 第一五回若山牧水賞に 島田修三氏の歌集『蓬歳断想録』と川野里子氏の歌集『王者の道』

第一五回若山牧水賞は、島田修三氏『蓬歳断想録』(短歌研究社)と川野里子氏『王者の道』(角川書店)に決まった。二名同時の受賞は四年ぶりで三回目となった。

授賞式は、平成二十三年二月九日(水)宮崎観光ホテルで挙行された。選考委員は岡野弘彦氏、佐佐木幸綱氏、馬場あき子氏、伊藤一彦氏の四名。授賞式の後、選考委員の一人である岡野弘彦氏による「牧水・啄木・逍空」の記念講演が行われ、翌十日(木)には、日向市東郷地区文化センターで島田修三氏の「牧水と万葉」、川野里子氏の「近代の空間、牧水の空間」と題した記念講演が催された。

受賞に際し、島田氏は「受賞は望外の喜び。歌集を評価していただいたことが何よりもうれ



写真提供 宮崎日日新聞社

しい」。川野氏は、「歌を詠み続けてきてよかつたと心から思う」と述べた。

選考理由として、島田修三氏について、佐佐木幸綱氏は男つぼさの基盤に優しさがあり含羞を詠める歌人である。また、川野里子氏について、馬場あき子氏は切迫して暗く寂しい現実を豊富な言葉で明るく歌っていると評した。

島田修三氏は一九五〇年神奈川県生まれ。横浜市立大学文学部卒。現在愛知淑徳大学副学長。七五年「まひる野」入会。歌集「シジフオスの朝」で寺山修司短歌賞、歌集「東洋の秋」で前川佐美雄賞、山本健吉文学賞を受賞している。その他の歌集に『晴朗悲歌集』『離騒放吟集』『東海憑曲集』がある。

歌集『蓬歳断想録』から自選作品を紹介する。

ゆふぐれを煙草くゆらせ放心にただよふ誰も来るなよ崇るぞ

おいそこの学部長、寝てんぢやねえよとわが言はざれば静かなり会議

八月をソルジェニツイン逝き母が逝き有名無名に死はゆるぎなし

午後の陽にほどけるごとく黒猫の臥してをりしがしじみ欠伸す

濃く淡くこころこころに闇を抱く学生百の名を呼ぶかなや

詩に瘦るといふこともなき歳晩の今宵を煮えて濃きブリ大根

川野里子氏は一九五九年大分県生まれ。千葉大学大学院文学研究科修士課程修了。「かりん」編集委員。八四年「かりん」に入会。第三歌集『太陽の壺』で河野愛子賞、評論集『幻想の重量』葛原妙子の戦後短歌で葛原妙子賞を受賞。その他の歌集に『五月の王』『青鯨の日』。

歌集『王者の道』から自選作品を紹介する。

背中にひとり湿布貼るすべ湿布ひろげ狙ひさだめて寝ころぶと言ふ

ここで死にたいここでと言ふ母の不思議な力家にくひ込む

すみません水くださいと母言へりこの世のどこかの誰かに向けて

サンチャゴの鐘は遠き日耶蘇の鐘納戸のやうな豊後に響りぬ

さくらさくらふはりと降りてあんぱんの臍の窪みを湿らせ咲けり

桜散り桜が覆ふ母の家美しくなる棺のやうに